没落

錆びついた橋脚から
赤茶けた粉がぱらぱらと落ちている

既に平等など残ってはいない
獲得と排除———それだけだ

小さな窓に魂を吸い取られたまま
無表情に行き交う者たちの群れ

過去の創造物を捏ねくり回すことには飽きた
今必要なのは解体である筈なのに

我々は何も教わってこなかった
抽象的な何物かが脳髄を食いつぶしていく

落ちぶれたということを味わえ
俺たちと共に、没落の味を噛みしめろ

同情などできるはずもない
お前たちの借金は自ら返済しろ

この国を立て直すのは
経済ではない

叩きのめされても俺たちは起きない
お前たちが腑抜けに育てたのだから

こうして滅びてゆくのだ
ただ静かに———消えてゆきたい

ここにあるのは安逸と焦燥
もしくは、その混合物でしかない

固唾を飲んで見守る群衆の視線の先に
処刑人の斧がきらめいている―――

いや、そうではない
群衆の嫉妬そのものが斧となっている

寂寥の中でだけ見えるものが
空に浮かんでいる

(2014.1.26)